

---

# Muv-Luv TE-if- (リメイク中)

アンノーン万歳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Muv-Luv-T.E.-if-(リメイク中)

### 【NZコード】

N4106Z

### 【作者名】

アンノーン万歳

### 【あらすじ】

1月10日、リメイク開始

2001年、BETAの地球への侵攻が開始されてからおよそ28年

世界の残り人口はおよそ十億人。かつて人類が支配していた星、地球。

その土地の半分はいまやBETAの物となつており、人類は未だそれら地域の殆どを奪回する事が出来ていない。

あまりにも絶望的な戦況の中、誠しやかに囁かれる噂が有つた。

世界各国の企業 かつてカナダに存在したレイレナードを主体とし、アメリカのグローバルアーマメンツ、イギリスのローゼンタール。

日本の有澤重工、西アジアからオーメル・サイエンス・テクノロジー、中東からはアルゼブラ。ヨーロッパからはインテリオル・ユニオン。北欧からはアクアビット。

様々な兵器の分野で素晴らしい業績を残してきたこれら企業が、一つに合併。

その名はアスピナ機関 既存の兵器とは全く違つた概念と戦略を持つ新たな兵器の開発に着手している。

既に幾つかの兵器は実践に投入されており、そのどれもが目覚しい戦果を挙げている。そしてこれらは人類の希望なのだ と

## プロローグ

2001年 4月 30日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称  
エリア51

アスピナ機関、米軍共同研究区域特殊実験施設

太陽の光も入らない、光源も何も無い狭い密室の中。  
衛士用の強化装備を着ている意外はなんの変哲も無い少年。 年は  
十代半ば、それより少し若いといったところか。

「 AMS、接続開始します」  
「接続レベル、0 - 01から開始。 時間の経過と共にレベルを上  
げていきます」

彼が普通の人間と決定的に違う所があればただ一つ、サイボーグ 義体の様に  
増設された首の後ろ。 頸椎に当たる部分の接続用ジャック

そこには既にプラグが差し込まれ、それが続く先は椅子 正確に  
言えば“コツクピットのシート”

何も知らぬ他人がこれを見れば、狂気の人体実験としか思えないだ  
ろうし、事実彼らがやっている事はある種狂気じみている

「エクスペリメント05とラインアーケの完全接続を確認。 成功  
です」

「ふむ……では、AMSの接続レベルを0 - 5までゆっくりと上げ  
て行け」

“人体と機械の融合”脊髄や延髄を経て脳と戦術器の制御装置を直結させてデータのやりとり。

### Allegory Manipulate System

戦術器の近接戦闘における反応速度の超上昇、思考によってコントロールされる精密射撃、視覚情報の共有による敵の早期発見。主にこの三つを目的として開発された戦術器の新たな操縦方法。脳と制御装置における電気信号を完全に理解、やりとりする必要性が有るために操縦出来る人間は極僅かだが、AMSを搭載した戦術器は並みの戦術器とは比べ物にならない性能を誇る。

「AMSの接続レベル2-5に到達……凄い、理想値の一倍を超えている。エクスペリメント05もまだまだ余裕みたいですね」  
「これなら自分の体のように……いや、自分の体を動かすよりも容易く戦術機操れるだろう

ふんっ……何が役に立たない机上の空論だ！ いざこうして完成させてみれば、今までの戦術機など塵芥も同然ではないか！！

戦場は変わる、時代遅れのノーマルTSFは排斥され<sup>戦術機</sup>て私の発明こそがBETA共を蹴散らしてくれる！」

故に、こう呼ばれるのだ。

「私のネクストがなア！！」  
次なる者

2001年現在 世界人口約10億人 日本人口約7400万人  
人類は以前滅亡の淵に有り されど、一筋の光が現れる

アスピナ機関に属する少年の名をエクスペリメント05。

20

人のAMS適正所持者の中でも、ずば抜けた適正を持つ一人の少年  
そして彼専用に開発されたネクスト戦術機TSFLINE ARC、コ  
ドネーム『ホワイトグリント』  
単純戦力にして戦術機数十機分とも呼ばれる程の彼等の登場が、果  
たしてこの世界に何を齎すのか

## プロローグ（後書き）

基本的な知識について

- AMS

パイロットと機体をコネクタによつて接続、機体情報を電気信号としてパイロットが脳を使って直接やり取りする操縦方法

通常の戦術機は

思考 入力（操縦） 出力（戦術機の行動）だが、AMSを搭載していると思考 出力

レバー やスイッチなどの操縦という過程をすつ飛びしていきなり戦術機がパイロットの望んだ通りの動きを行うために反応速度が非常に高まり、指先といった細かな挙動も御しやすくなる

一方で機体情報を総て電気信号として受け止めるために、AMSを扱うには特殊な才能が必要となる

- AMS適正

文字通り、AMSをどこまで上手く扱えるかのような基準値。

適正が低ければ機体の操縦はそれだけ大雑把になり、適正が高ければより細かな挙動が可能。

指先といった細かい部品を排除し、情報量を減らすなどすればAMS適正が低くてネクストを操る事が出来る（他には腕を丸ごと武器にする、等）

- 接続レベル

オリジナル設定、パイロットと機体をどれだけシンクロさせるか。この数値が高ければ高いほど細かな操縦を行う事が出来る、という

点ではAMS適正と殆ど同じ。

しかし、接続レベルをパイロットの適正に見合わぬ程に上げてしまうとパイロットの精神に大きな障害を与える諸刃の剣。

これの調整は非常に難しく、今までに四人の人間がAMS接続レベルの上げすぎによって“壊れて”いる。

AMSとはパイロットと戦術機を接続する、言つてしまえば自分=戦術機となるのだ。

あまりにその結合が強くなれば“自分”を見失ってしまい、その例えようのない感覚に耐え切れずに壊れてしまつ。

- LINE ARC ホワイトグリント

主人公の乗る機体、詳しくは「ホワイトグリント」で検索。

武装はライフル二挺と分裂型ミサイル、状況に応じて変更可能。

アサルトアーマーとかプライマルアーマーは流石に使えない、それでもAMSを搭載しているために並みの戦術機とは比べ物にならない戦力となる。

## プロローグ2

空は灰色の雲に覆われ、大地は永遠に終わらないかのようにのように地平線へ続く砂で覆われている。

そこ上の上空200m程を高速で飛翔する白の閃光

「エクスペリメント05のAMS接続レベル5'0にて安定 ライナークの戦闘エリアまで後十秒」

戦闘機とはかけ離れたその姿を一言で例えればX字だ  
両腕は肩と共に正面へ突き出され、その手に持ったライフルは機体の前へ向けられている。

背中に翼のように取り付けられた十四個のブースターは七個ずつ一直線に広げられており、更にそのすぐ下には十二個のブースターが六個ずつ、丁度X字になるようにして青い炎を吹いている。  
頭部は突き出した胴体に埋もれるように埋没しており、とても人型とは思えない。

一直線にならぶブースターの両端に付けられた三角の箱は分裂型ミサイルSA LINE05。

両腕にはそれぞれ051ANNR、063ANARと呼ばれるライフルを装備したその戦術機の名 未だどの国のデータベースにも登録されておらず、この世で唯一AMSを搭載した実践的な戦術機。

『じゅうじゅうエクスペリメント05ホワイトグリント、作戦を開始します』

LINE ARK ホワイトグリント白い閃光、ネクストTSFと呼ばれる通称

“最強の戦術機”

それが行なつてゐる今回の作戦は単純明快、進行してきたBETAの集団を一機で全滅させる事。

本来ならば何機もの戦術機と補給用コンテナを用いて行われるような任務に対して、投入している戦力は一騎 正氣の沙汰では無い。

BETAの中でも光線級と呼ばれる遠距離砲撃に特化した個体は既に“彼”とホワイトグリントを認識し、その眼球の様に見える部分に少しづつ緑色の光が集まつていき レーザー放たれた。その一筋に伸びていく緑の光線は確かにホワイトグリントに向かって飛翔し

瞬間 爆音と共にホワイトグリントは姿を消した

「クイックブースト……瞬間最高時速は2500kmと言つた所か、VOB無しでこの速度……ふふ、凄まじいな」

「それはオーバードブーストとクイックブーストの同時起動ですか……ですが、チューニング次第ではこれ以上の数値も可能ですよ」

次の瞬間、先程までホワイトグリントが飛翔していた場所より遙か斜め前に現れる純白の塊。

あれ程の速度で巡航を行なつていながら激しい加速で無理矢理進路を変更し弾を回避する、戦闘機でも戦術機でも不可能なそれを成し遂げる。

それを成功させたホワイトグリントが使つた機能は単純、オーバードブーストと呼ばれる超高速機動中に使用したクイックブーストと呼ばれる瞬間的な急加速だ。

通常、戦術機において一瞬でこれほどの加速を行えば機体のバランスが制御出来なくなったり、搭乗者がGに耐えられなくなったりで使い物にはならない。

しかしネクストは違つ A M Sと呼ばれる特殊な制御方式を採用し、さらにこれまでの研究データを元に開発された特殊強化装備を着込む“彼”ならば。

進路を無理矢理無視して瞬間時速2500kmで急激な拳動を可能とするこれは最早“テレポート”と呼んでも相応しい。ミサイルなど目前僅か数mに迫ったところから回避できるし、遠距離から放たれるレーザー等“予め発射される事を分かつていれば”何という事は無い。

その異常な瞬間速度も少しづつ下がっていくとそのままホワイトグリントの両肩のミサイルハッチが開き、火薬が炸裂するような音と共に二つのミサイルが放たれる。

『ホワイトグリント、ミサイルの着弾を確認後オーバードブーストを解除して通常戦闘に移ります。

戦闘データ、ちゃんと取つてくださいよ』

「ふふつ……ああ、任せておきたまえよ。私の愛するホワイトグリントが戦うのだ……一瞬だつて目は離さないわ……」

そのまま次々と放たれる三発、四発目のミサイル 強引な光線の回避と共に響いた火薬の炸裂音の回数が一つにつき一度24を超えた辺りで、背部ミサイルユニットはユニット接合部に予め装填された炸薬によつてパージされる。

ホワイトグリントの後方へと落ちていくSALINE05、一方ソレが最初に放つたミサイルは変貌を始めていた。

「ミサイル第一射、着弾まで10……9……」

一番最初に放たれた中型のミサイルが、空中で“分解”した  
いや、正確にはそう見えただけ。

ミサイルを覆う白の装甲が剥離して中から現れる八発の小型ミサイル……SALINE 05の所持する分裂ミサイルはその名通り八つの小型ミサイルに分裂してそれぞれが違う目標に接近する  
それが $2 \times 4 \times 2 \times 8$ 、合計で384発放たれたのだ いくら小型  
とはいえその威力は対人兵器の比ではない。

小型の戦車級や防御力の余り無い光線級はおろか、要撃級、さらに突撃級にすら致命的なダメージを与える事が出来る。

広大な砂漠には無尽蔵の砂煙が散時かれ、BETAだつた残骸がバラバラに落ちてくる地獄の様な様相を見せる場所にホワイトグリントが着地する。

着地する前に行われた変形により頭部はちゃんと上部へせり出して  
いるし、X字のブースターも折り畳まれてより戦術機らしい外見には近付いているが……その戦闘力はやはり戦術機を凌駕していた。

クイックブーストによる回避、射撃、射撃、回避、射撃、回避、  
回避、射撃射撃射撃……

無限とも呼べるほどの機動力を持つホワイトグリントに鈍重なBETAが近接戦闘に持ち込める筈もなく、突撃級の攻撃も簡単に回避され 拳句には飛び箱の様に突進する突撃級の外角を踏み台にして跳躍 そのまま装甲の薄い後方部へ射撃。

戦術機はおろか人間ですら可能か不可能か分からぬ機動で回避と攻撃を一つの動作の中に纏めたのだ、その様な行動を容易く行うホワイトグリント一機に対してもBETA群は蹂躪され続け……

そうして作戦開始から十数分が経過した後。  
BETAの全滅を確認した統合仮想情報演習システムは終了、複数による訓練を想定した対BETA防衛戦維持訓練。  
それもBETAの数を通常の何倍にも増やした訓練すらAMSを搭載した戦術機 ホワイトグリント一機にすら及ばないという事実が全世界に証明される事になった。

この情報を受け、世界 特に戦術器の能力不足に悩む帝国は“ネクスト”の研究を、可能ならば実戦配備を行うべきとの結論に到達。

XFJ計画の要項に加えられた一つの文章 それは至極単純な物

- ・アスピナ機関、及びアメリカの協力により不知火に試験的なAMSを搭載、戦力やパイロットへの副作用を初めとしたデータの収集

2001年 5月 3日  
アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称  
エリア51  
地下四階 アスピナエリア

「先のデータを受けて、帝国からもアスピナ機関への協力の申し出

が有つたよ。

ふふ 純国産の不知火をアスピナ機関で改造して良いらしい……  
とはいっても、AMSを乗つけるだけだけどね。 その代わり戦闘データはこちらも貰つて良いらしい。

……君にこひいう話は分からぬかな？」

『……申し訳ありません』

一つの長机を挟んで椅子に座る金髪の男と、それに向かい合ひ形で立つ少年。

前者の姿はホワイトグリントのシミコレーターをずっと見ていた初老の男、後者はそのホワイトグリントを操つていた少年 エクスペリメント〇五。

男はぴつちりとしたスーツを着こなしている一方、少年の方は衛士用の強化装備の上から長袖のジャケットを適当に来てゐるだけなのも印象的だ。

何よりも印象的なのは、彼の服装か

強化装備には記されているのは〇と丁を組み合わせたかのようなアスピナ機関のマークであり、国家や軍属である事を示すマークは付いていない。

ジャケットは恐らく市販の物 ここまで来れば、彼の立ち居地が分かるだろう。

彼は軍人ではないし、何処かの国家にも属していない。 ただのアスピナ機関という研究機関に自分のAMS適正と体を売り出した被検体であり傭兵の様な存在。

アスピナに正式に所属しているも階級等はそもそも無いし、軍隊の様に細かい規律も無いために服装も自由 ちゃんと上の指示さえ聞いていれば基本的に自由なのだ。

男の名前はリー・バトラー。ホワイトグリントの設計から開発、さらにその運用の全てを一任された研究者であり機関の幹部。ホワイトグリントに関連する事象は全て彼の命令で行われ、当然ホワイトグリントのパイロットも彼の指揮下に置かれる。

「気に止む事は無いよランク1、元より我々が君に期待しているのはその高い適正と能力だ。」

考える事は我々の仕事だ……さて、そんな君に新しい仕事だよ

『……』

口を開く前から、少年は大体察しが付いていた。

先程の帝国軍の前置き、不知火の改造の話、そしてその後いきなり自分に渡される任務

「君にはアラスカに行き、そこで試験型不知火のテストパイロットを勤めてもらう……アメリカ、帝国、そして我々の協力任務だ。適正を持っていて尚且つテストパイロットが勤まるような実力を持つのは君だけだからね」

## プロローグ2（後書き）

Q・ホワイトグリント強くな?

A・プライマルアーマーとアサルトアーマーを持ってないからこれでも弱体化した方

## 追記1 通常戦術機操縦法とAMSの差について

強化衛士装備に関する資料探しをしていたら、自分の無知によつて作中に矛盾が発生してしまったので此処に記述します。

作中では、AMSとは「思考と同時に機体を制御する事が出来、才能さえ有ればほぼ直感だけで操縦できる」というふうに記述していましたが。

通常の戦術機も間接思考制御で操縦しているという事を私は知らずに書いていました……

そのために、これらにAMSと間接思考制御の違いを記述しておきます。

まず、通常の戦術機の間接思考制御。

これはヘッドセットとスースで脳波等を測定 装着者の意思を統計的に数値化しデータを更新 戦術機や強化外骨格の予備動作に反映させる。

一方のAMS、これはヘッドセットとか関係なしに操縦者と機体が直結しています。

つまり、己がどのように機体を動かすかを“直感的”に電気信号に置き換えてそれを機体の統合制御体へ送信。

この一つがどのように違うかといふと、情報の精度と反応速度です  
戦術機ならば『思考 数値化 データ更新 動作』となります  
AMSは『思考（と同時に電気信号に置き換える） 攻撃』、つまり思考と同時に攻撃を行つております。

またAMSは『統計的に数値化したデータ』ではなく、文字通り機体＝自分の体となります。

それは当然、指先といった非常に細かい部分まで機敏な動作を可能としており、通常の戦術機とは一線を画す精密作業を行う事も可能。ひとまず、操縦系統の差に関してはこのような設定です。  
これから先も設定に矛盾やおかしな部分が有ればこいつして追記していくので、是非呼んで頂ければ幸いです

## 設定

情報量不足の為に、完全な情報開示は不可能

現状“彼”について知りうる全ての情報を表示

呼称：エクスペリメント〇五、ランク1

年齢：10代半ば、それより少し若い程度と思われる

容姿：色素の抜けたような薄い金髪、黒目、身長は150cm程度と思われる。

首の後ろ、頸椎の部分にはAMS接続用のジャックが付属しており、それを隠すように後ろ髪を伸ばしてさらにマフラーを常に付けている。熱帯では包帯を使用。

アスピナ機関のマーク（小さめの○に大きな丁）が描かれたような物）が描かれた強化装備の上からジャケットを羽織るのが普段着。

性格：任務に忠実、作戦行動中は若干興奮状態に入る模様？ 情報量不足

備考：黒目と金髪からアジア人、西洋人のハーフと思われる。

戦場に立つのはおかしいような年齢であるが、ネクストに乗った際のその戦闘能力は並みの衛士では十数人居ようと抑える事は出来ない。

当然 　 というのもおかしいが通常の戦術機に乗っても非常に高い戦果を叩き出す、まさに“戦争のために生まれた様な子供”

非常に高いAMS適正を持ち、脊髄や脳に『えられた電気信号を“一瞬で完全に”情報として認識可能。当然脳内の情報を自らの意思で電気信号に変換する事も可能。

過去の記憶を脳内で“電気信号”に変換し、それを機械媒体を用いて“映像”として他人に見せる事が出来る。

これは天性の才能で有るため、本人には非常に高い学力といった物は確認されていない。

本名は不明。アスピナ機関の実験体に名前がある確信すら無いが。

戦闘中は自信に満ち溢れた言動を放つが、それ以外では大人しめ。興奮状態になると気性が荒くなると推測される。

上官の命令には非常に従順。

エクスペリメント05の駆る戦術機はLINE ARK、通称『ホワイト・グリント』アスピナ機関にて、彼の為だけに作られたワンドオフ機。

量産も可能なだが、操縦には非常に高いAMS適正が必要なために量産したとしても乗りこなせる者は三人居れば良い方だろう。

尚、彼はこれ以外に「TYPE-LAHIRE」「X-SOBRE RO」呼ばれる高速機動戦用の機体を操る事が出来る。

彼が搭乗する機体は総て白くカラーリングされており、数少ない彼の実戦を見た衛士の間では「白のイレギュラー」「アスピナの白い闪光」と呼ばれ、その噂は『BETAに対する人類の切り札』として常に広まり続けている。

搭乗ネクスト：LINE ARK

> i 3 7 4 3 6 — 4 6 8 5 <

> i 3 7 4 4 0 — 4 6 8 5 <

そのカラーリングから、ホワイトグリントといふ名で呼ばれる事が  
多い現状最強のネクスト。

変形機構、非常に高いオーバード、クイックブースト能力を持ち、  
当然AMSを搭載しており、カメラアイ保護シャッター機能など新  
技術も搭載。

エクスペリメント〇五の為だけに作られた完全ワンオフ機でありな  
がら、今まで作られたネクストと共通の規格を使用しているために  
過去に作られた武装も使用可能。

基本はライフル一挺、ミサイル一つ、レーザーブレークを標準装備  
として所持しているが、戦況によつては武装の変更も行う。  
例えば、中距離支援装備としてガトリングを四門装備する事も可能。

TYPE - LAHIRE

ライール

> i 3 7 4 3 7 — 4 6 8 5 <

戦闘機をそのまま人型にしたような、独特的の鋭角と前傾姿勢を持つ  
ネクスト。 LINE ARK以前の“彼”的乗機。

防御力や安定性能に欠けるもののホワイトグリントすら超える瞬間  
速度を持つ速度特化型近接戦闘使用のネクストで、武装もそれに合  
わせた物が多い。

主な武装は左腕に近接戦用ショットガンSG-0700、右腕には  
アサルトライフルAR-0700、背中には独特的の四連チーンガン  
XCG-B050を二つ。

中距離支援を行う際には右腕のアサルトライフルはそのままに、左  
腕にレーザーバズーカ型実験兵器ER-0705、背中には二方向  
から飛翔する四連PMミサイルMP-0901を二つ装備する。

## X - SOBRE RO

> 137439 — 4685 <

通称壊れやすい物、その名の通り他の戦術機の三分の一の装甲すら無い。特筆すべきはその異形のフォルム。

前から見ると非常に薄く、板の様にしか見えない頭部。胴体は肩と背骨の部分しか無い、文字にすれば丁。その腕は肘が存在せず指も無い、武器はただ“挟むだけ”である。

両足も膝が無いためにぐの字の様な板にしか見えない、これらの情報をおわせるとこうなる

穴 上から頭、肩、両腕、足

尚、この機体を使って彼は一度実戦に出でおり、その際には「アスピナの変態兵器」「アスピナは変態」「空飛ぶ変態飛行機」と散々な渾名を得た。

しかしその実力 特に速度の一点においては筆舌に尽くしがたい。穴の字のような巫山戯たフォルム故に空力特性は非常に高く、更に背中には追加ブースターA C B - O 7 1 0を装備したその瞬間速度は“時速約60000kmオーバー”

現代史上最速の偵察機、S R - 7 1の速度がマッハ3・2。つまり時速3916km。一方この機体は時速約60000km以上。ちなみに一般の戦術器も時速8000kmくらいが限度。最早AO<sup>あたまおかしい</sup>直立不動の体勢や、ゆっくりとした移動から急激に方向転換して時速60000km以上を出して視界から消え去る。最早ブーストといつよりも“テレポート”にしか思えない。

武装は両腕に強化型マシンガン、03 - M O T O R C O B R Aを一挺。

正直ネタのため、作中に出るかは不明。

## 某ゲーム風ステータス

戦術機操縦…B+ 数多の衛士の中でも非常に高い戦術機の操縦能力。

並みの衛士では十人程度で同時に奇襲を仕掛けない限りは彼を倒す事は難しい。

ネクスト操縦…A+++ 戰術機の中でもネクストと呼ばれる物をどれほど上手く操れるか。

基本的にAMS適正の高さに比例して上昇し、このレベルまで辿り着くと精密機械すら超える操縦を可能とし、一機で戦術機数十機分以上の戦闘能力となる。

AMS適正…A+++ 人間のままでは絶対に辿り着けない境地に、生身の人間のままだり着いている。

あらゆる情報を一瞬で電気信号に変換、それと同時に電気信号を一瞬で自分の脳内で情報として処理する事が可能。

頸椎のジャックと繋げることにより、常人を遥かに超える速度でのPC操作が可能。

心眼（偽）…A- 己と感覚を共有するネクストと共に戦い続けた事により得た第六感であり、危険察知能力。

完全な死角からの攻撃ですら反応が可能、生身の状態でもこのスキルは常に発動している。

戦闘技術（偽）…B+ 己と感覚を共有するネクストと共に戦い続けた事により得た戦闘技術、危機的な状況に陥った際にネクストを操縦するように自分の体を動かし、危険を回避可能。

大人と正面から渡り合い、武装さえ持つていれば数体の戦車級とも

まともに戦える。

勇猛：C 戰闘中にのみ発動、興奮状態に陥る事により威圧を無効化して恐怖心等といったものを軽減させる。  
一方で知性の若干の低下を招いている。

実戦経験：D - 数回だけ実践を経験、一応経験値となっている程度。

自信過剰な者がこのスキルを持っていて、且つランクが低いと自分の能力を過信して戦死する事も有るためにメリットとデメリットを併せ持つスキル

## Word

AMS：アスピナ機関及びリー・バトラーが提唱した次世代の戦術器、ネクストを操縦するためのシステム。

電気信号を脊髄を介し脳に直接送り込み、『思考と同時に攻撃を行う』事を可能としたが、それ故にこれを扱える物は何百万人に一人といった規模でしか存在しない。

さらに、それで見つかった者達の中にも著しい優劣の差があり、実戦で使えるのはその中のほんの一握り。

彼等は適正や能力によって“ランク付け”されており、このランクとはアスピナ機関における実質的な階級。

ランク1は機関内において通常の軍の左官クラスの発言力を持つ。

ネクスト：AMSを搭載し、通常よりも遙かに精密、機敏な動きを得た戦術機。

AMS適正の高い物が搭乗したネクストは一機で戦術機数十機分の戦力となる程の強さを誇り、“彼”は搭乗した際には一騎当千の戦果を上げる。

尚、ネクストとAMSで操縦している時は機体のダメージはモロにパイロットに直結する。当然機体が戦闘中に機能停止すればパイロットの脳もそれと同じように全ての機能を停止する。

これは直前でAMSアダプタを引き離す事により回避できるが、それを戦闘中に行えば当然機体を操縦できなくなつて死ぬ この様なデメリットも存在する

AMS障害：AMS適正の低い物がAMSの接続レベルを上げすぎた際に発生する人格障害。

症状は多種多様だが、主に自己の喪失や精神崩壊が主。

また、極稀では有るがAMS適正が高い物もこの人格障害を発症する事もある。

SALINE05：通称“グリントミサイル”、OPで一目惚れし、実際戦つてその余りの性能にトラウマになつたプレイヤーは多い筈。非常に高い誘導性能、威力、長時間戦える装弾数と正直あの性能は酷いと思つ。 レギュ1'00にすれば地獄が見れるぞ!!

このマップラヴ世界に置けるグリントミサイルは、その厨性能を遺憾無く発揮する分裂ミサイル。 但しゲーム基準なので装弾数がAOあたまおかしい

051ANNR：ホワイトグリントが右腕に持つライフル、その性能は「051ANNR、相手は動けなくなつて死ぬ」。特にレギュ1・00では地獄を見れるぞ！！

中、遠距離において非常に高い（厨）性能を發揮し、着弾時の衝撃は非常に高く、要撃級ですら一発命中するだけで動きを止める事が可能。俗に言つハメ殺し。

近接戦闘に置ける取り回しは少々悪い物の、先端部にはスパイクが装備されており一応近接戦闘も可能。

063ANAR：ホワイトグリントが左腕に持つアサルトライフル、火力こそ低いものの高い水準で纏まつた性能を誇る。威力から中距離戦闘に優れており、命中精度が非常に高い。尚、これ以外にもホワイトグリントは武装を持つているが主としてこの二つを愛用している。

07-MOONLIGHT：月光、アーマードコアにおいて代々出演する最強のレーザーブレード。

使用する際にホワイトグリントの出力の20%を持っていくが、その性能は　突撃級の全面装甲を簡単に両断する位

一応常にホワイトグリントに装備されているのだが、普段は日の目

を全く見ない不遇の残念武器。後半からは活躍させたい。

## 設定（後書き）

Q・主人公強すぎね？

A・30機で、一ヶ月で国家の悉くを解体する兵器のパイロットですから

Q・ネクストって強いの？ やベエの？

A・通常の戦術機をWW2中のレシプロ機として、ネクストはF22通常の戦術機をT-34として、ネクストはM1A2

Q・原作キャラがネクストに乗りたりするの？

A・出切るだけ無いようにしたいです

次回からトータルイクリプス本編、早いうちに全巻読まないと……

## 第一話（前書き）

前回書き忘れていたので追記。

エクスペリメント〇五のHンブレムは「子供の落書きの様な乱雑さで描かれた白い数字の「5」」これは設定に張つてある画像で確認可能です。

イメージ曲はAC4の「Blind Alley」となつております。

ちちない……げふん、ジナイーダちゃんが倒せない

## 第一話

### X F J 計画要項

試作AMS搭載型不知火式型の運用試験。

本機は日本帝国の戦術機である不知火・式型にAMSと呼ばれる新たな操縦技術を搭載した試験的な戦術機である。

AMS適正を所持する衛士は日本帝国内に存在しないためにアスペナ機関に所属する“エクスペリメント〇五”を主席開発衛士とし、様々な状況下における試験を行う。

尚、本機は量産も視野に入れているためにAMSの接続レベルは0.01 AMS適正を殆ど持たない衛士でも操縦出来る範囲内に制限する。

このレベルのAMSによって得られる利点は……

「……巫山戯て、いるのか……！」

暗い一室の中、手に持つ書類に目を通しながら女性は辛辣にそう吐き捨てる。

「B E T A 異星起源種を打ち倒すためとはいえ、人体を改造するなど正気の沙汰ではない……！」

その言葉を拾えば、彼女が何に対しても怒りを露にしているのかを理解出来よう。

X F J 計画 次期主力戦術機の開発までの継ぎとなる機体を開発するために練られた本計画は、一つの機体の試験運用を行う。

ひとつは不知火の改造型、一型丙に米国製のパーツを使用する事によつてそのノウハウを吸收、さらなる発展を目指す不知火・式型。そしてもう一つは 書類に記載されている通りのソレ。

A M Sと呼ばれる、パイロットと戦術機を電気信号によつて結びつけて戦わせる特殊な操縦技術。

当然これを行うには生身の人間では不可能。リンクス山猫と呼ばれる人体に特殊な改造を施した者でなければ操縦できないのだ。

しかしそれが齎す恩恵は絶大 この女性とて知らない訳では無い。

ただ一機のネクストにすら、戦術機では数十機集まろうと到底及ばない事を、そしてそのネクストが一部衛士の間で『人類の切り札』と呼ばれている事を。

だがしかし それを理解してもまだ、彼女の人間的な理性はそれを拒もうとしていた。

「 明日、  
A M S  
帝国軍も、コレに頼るしかないのか……B E T Aを倒すためには……」

しかし彼女の立場で、上からの命令に背くわけも当然いかず。諦めのような感情の混じった咳きは、誰にも聞かれずに

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

### 総司令部地下一階 C108ブリーフィングルーム

「さて、彼がXFJ計画最後のテストパイロットとなる……」

灰色の装飾も何もない部屋の中、幾つか長机と椅子の置かれたブリーフィングルームの中に一人の少年が居た。

彼の他にも当然人は居る 男性が二名、女性が二名椅子に座つており。少年の横に立つように男性が一人、女性が一人 そして、彼にぴったりと寄り添うように立つている白衣を着た男性だ。

白衣を着た男性以外、全ての目線は少年に注がれており。一方の少年は 別に目線を返す訳でもなく、空氣の様にそこに在るだけ。

「アスピナ機関出身、ランク1。 エクスペリメント05 階級

は無いので、どのように接して頂いても構いません。

名前は エクス、と呼んでいただければ。」

色素の抜けたような、若干黄色がかっている程度の薄い金髪にアジア人特有の黒い瞳。

身長は低く150程だろうか……室内で、5月だというのもマフラーを付けているのは何かを隠すためだろうか、ぐるぐると固く巻いてある。

筋肉質ではなく、一般市民が此処に紛れ込んでしまったといったほうが説得力の有る程に軍人からかけ離れた姿の少年

一応、此処で少年以外の者達の心情を説明しておこう。

まずは彼の目の前の椅子に座っている褐色肌の少女、タリサ・マナ

ンダル少尉。明らかに自分よりも遙かに若いであろう少年衛士の姿を見て彼女が思った事は単純だ。

「（おいおい、こんなガキが役に立つわけないだろ……そもそも名前も出さないような奴とどう接しろっていうんだよー）」

次に、その隣に座るワーテン系の男性　ヴァレリオ・ジアコーザ（実験体）（ようにもよつてアスピナ、か……どうにもキナ臭くて嫌だね。）

「（その反対方向に座る女性、ステラ・ブルーメルは彫刻の様に無表情。何を思っているのかすら分からぬために、その隣の男性。ユウヤ・ブリッジスに移る。）

「（実験体）（エクスペリメントの五番目とは随分ふざけた名前じゃねえか……俺達には名乗る名前すら無いってのかよ？）」

彼の思考は、どちらかといえど怒りに染め上げられている。エクスと名乗る少年の名前は、一般的な常識を持つ彼等には“ふざけて偽名を使っている”という風にしか映らないのだ。最もそれが当然と思えるが。

ホワイトボードの前に立つイブラヒム・ドゥールと篁唯依の二人の心象もほぼ同じく。

そして少年の自己紹介が終わると　その隣に立つ男性が一步前に歩みを勧め。

「私がエクスペリメント〇五、及び彼の乗機の管理を任せている

リー・バトラーだ。

今回XFJ計画においては不知火・式型に搭載するAMSの調整も行わせてもらひ よろしく頼むよ

「では次に私から“ネクスト”そして“AMS”について説明させてもらおう。」

その男性の自己紹介が終わった直後、篁唯依中尉が前に出ると様々な情報が皆が持つ端末に映し出されていく。  
氷のような無表情のままに、皆がソレに目を向けた事を確認すると話し始める。

「AMSとはアレゴリー・マーコピュレート・システム……脊髄を介すことによつて脳、そして戦術機の統合制御体を直結させる事で戦術機を“思考”により操縦する事だ。

当然、この様な操縦を行う為に様々なデメリットも存在する、まず第一に AMS適正と呼ばれる天性の才能を持つ者のみしか使用出来ない事、さらに適正を持つても人体の改造手術を行わないと使用出来ない事だ。

ネクストを操縦する事の出来る者をリンクスと呼び……それらリンクス全員には脊髄、延髄、頸椎を手術によつて改造し、写真のようなジャックを兼ね備えている。」

それと同時に映し出された画像は、リンクスを後ろから撮影した写真。

皆の目が行く場所はただ一点。 頸椎の部分に存在する金属製の差込口 通常の人間には絶対に存在しない様な物だ。

「しかし当然、それが齎す恩恵に関しては……最早説明する必要も無いだろつ。

一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え、  
跳躍ユニット無しでの空中飛行も可能。 クイックブーストと呼ばれる新機構は、移動状態や停止状態からその機体の最高速度まで急速を行う事も可能としている。

さらに、近接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍…  
彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能…

エクスペリメント05を初めとする、アスピナ機関のリンクスは一機で戦術機十機から三十機以上の戦果を上げる事が可能としている。

「　「　「　ツ　　！？　」　」

それらの情報を聞き、皆の反応は多少の差違は有れどそれが示す意味合いは総て同じだった。

信じられない、嘘に決まっている そんな田線が一斉に少年に向かられ、対する少年は若干困ったような表情を浮かべるだけ。

当然今の話は総て真実なのだが、確認する術は無く この中で唯一何かを知っているかのようにヴァレリオだけが納得している。

そして、彼等を指揮する人物であるイ・ブラヒムもこうなる事を理解していた。

故に既に手は考えてある この最前線にて部隊内に僅かな蟻りも残したくない、ならば最前線の衛士を最も効率よく納得させる方法

…

「 では、彼の着任祝いとして再度CASE・47を行う！ ただし今回の条件はテロリストがネクストとを使用していたという状況を想定して行うために……」

そう言って彼がホワイトボードに書いていく図は単純だ。

白い三角形と、四つの黒い三角形が向き合つように配置されている

「これが意味する事はこの場に居る全員は瞬時に理解した。」

「既にCPは壊滅している状況にてネクスト、LINEARKをこの地点にて戦術機四機による迎撃を行う。

圧倒的有利な状況だ……この状況で、リンクスとネクストの力量を見せてもらひつといい」

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ゲーコン陸軍基地  
テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング群が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eストライク・イーグルが、一挺の突撃砲を片手に、一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いているのだ。

音響センサーにひつかからないようにゆっくりと、出来る限り音を立てず……既に何度もわからない交差路のクリアリングを行なつてから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でビハラが先に全機落とされるかとこう単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るコウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”コウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたからだ。

「複合センサーにも引っ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間　コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方　複合センサーが表示した単語はUnknow<sup>不明</sup>。

そして此処、ゴーラン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などコウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？　こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引っ掛けられない訳がないだろ？　が……まあいい。さつさと撃破して終わらせてやるー）」

そつ思い突撃砲を構えた途端、コウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接

近している　迎撃はまだ間に合ひ、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かつて射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持つていてる故か　だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でテレポートする様に消えたのだ。次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

「ツ　どうこうシ……ー？」

通常ならば有り得ない自体にレーダーかセンサーの故障を疑い、何も異常が無い事を確認するとふと唯依の言葉を思い出す。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え” “クイックブーストと呼ばれる新機構は、移動状態や停止状態からその機体の最高速度まで急加速を行う事が出来る”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至つては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた三つの言葉が、今になつて重くのしかかり　ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は

“白”

ビルの屋上ストレスレーに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「ホワイト、グリントツ　――」

両肩から突き出すように伸びていたブースターはまるで変形するように短縮し、突き出すように出されていた両腕も至つて普通の人間らしい形状に戻される。

そうして着地しようとした刹那 ユウヤは背面突撃砲を起こし、更に手に握った突撃砲の一挺の引き金を下ろし発射 放たれた二つのペイント弾はビルの隙間へと“消えた”ホワイトグリントを捉える事は出来なかつた。

急いでレーダーに目を通すも、ホワイトグリントの移動速度にレーダーの更新速度が追いつかない。何度も演習を行なつてきた今までの“直感”を用いて、背面突撃砲のガンラックを起立させて背後へと射撃しつつ水平噴射<sup>ホライゾナルブースト</sup>跳躍にてビルの隙間へと隠れるように逃げる。

結果から言えば、ユウヤの方が追い込まれていた。

ユウヤが反応するよりも早く背後に回り込んでいたホワイトグリントが右腕に持つO51ANNRが射撃を開始、放たれた一発のペイント弾はユウヤが起立させたガンラック“だけ”を器用に打ち抜き、ペイント弾が命中したユウヤの突撃砲は使用不能と判断される。

一方で咄嗟の判断で射撃したユウヤのペイント弾は慣性で滑るようにならばいくホワイトグリントを捉えることが出来ず

「ちいッ」

隙間に隠れる事が出来た好機を生かし、弾数の心許無い突撃砲のリロードを行おうとした瞬間にまたもホワイトグリントは現れる。ビルの影から現れたソレは地上25m程の所を飛行しながら、両腕のライフルをF15Eに向け ホワイトグリントが引き金を引く直前、倒れ込むように反転しながらF15Eも手に持つ突撃砲をホワイトグリントに向ける。

倒れ込んだ御陰でライフルの射線からは外れ、一方でF15Eの手に持つ突撃砲は確りと標的に向けられている。

「殺つた！」

そうユウヤは確信して引き金を引いた。突撃砲から放たれたペイント弾は、その寸前で前方にクイックブーストを行ったホワイトグリントに命中する事は無かつた。

急激なクイックブーストを行い、倒れ込みながらもこちらを向いて振り返ったF15E<sup>ストライクイーグル</sup>の上を飛び越し、ドリフトの要領で急旋回地に伏せたF15E<sup>ストライクイーグル</sup>が起き上がるよりも早く、照準を合せ、ホワイトグリントが左腕に持つ063ANARが射撃、放たれたペイント弾はF15E<sup>ストライクイーグル</sup>のコアプロックに命中。

接敵から一分と経たずして、ユウヤのF15E<sup>ストライクイーグル</sup>は大破と認定されていた

## 第一話（後書き）

ジナイーダの簡単な倒し方を誰か教えてください……

Q . エクスは何でこんな強いん？

A . ラスジナみたいに、改造人間補正 + ラスボス補正 + ドミナント  
補正がかかるからです

## 第一話（前書き）

日常会話が一番難しい……

## 第一話

### ドミナント

一人の科学者によつて学会に提唱された言葉だ。

「人間には、環境に適応する力が有る。ならばこのBETAに侵略され、闘争を余儀なくされた環境に適応した新たな人類。生まれ持つて、戦闘に非常に高い適正を持つた人間が生まれてもおかしくないのではないか」

つまり先天的に戦闘適正を持ち、ドミナントが持つ戦闘能力は他社の追随を許さない。

かつて伝説的なまでの戦果を上げた人物や衛士は恐らく皆ドミナントだったのだろうという、非常に単純な学説。

しかし、この説は全くとつていい程に信用されていない。  
人類の進化など、所詮は絵空事。絶望的な状況に狂つた学者の希望的観測……この様に誰もがこの言葉を聞き流していき、既に消えた学説だ。

だが、仮に もしもその“ドミナント”が居るとすれば、それは一体どんな人物なのだろうか。  
それこそ、通常の人間にはまるで扱えないような兵器を己の手足のように操り。

通常の兵器に乗つても、他者を圧倒し。少口径の銃を片手に、異性起源種とですら対等に戦える存在か。

そり、そんな人間が生まれる筈は無い。

生まれる筈が、無かつた

「ツ 何なんだよ、コイツ!-?」

「成程……確かにコイツあ……!」

「……-」

一筋の白い閃光が、ビルの屋上スレスレに高速で飛行しながら両腕のライフルを放つ 放たれた弾丸は、狙いすましたかのように一機の戦術機の背部に命中。

オレンジの塗料が一瞬でぶちまけられた背面突撃砲は使用不能と判定され切り離される、こうしてまた一つ戦術機は武器を失っていく。

しかしその一方で、ネクスト ホワイトグリントに一発も弾丸を命中させる事は出来ていない。

放たれた弾丸は、悉くクイックブーストによつて回避され、戦術機ならば有り得ないような三次元起動を行なつて照準をずらし、こちらが攻めあぐねるライフルを使って“威嚇”を行う。

タイミングを合わせた十字砲火すら、一瞬後方に退避したかと思うと急激な加速を行なつて回り込むように背後を取り、ほんの数発だけ弾丸を発射。

明らかに狙いを定められて放たれた弾丸は、一機の F-15E ストライクイーグル アクティヴ・イーグル と F-15・ACTV の足元からほんの数 cm ずれたところに着弾する。

「舐めて、やがるのかよ ちくしょうおおツー！」

挑発するかのようなその行動に、真っ先に怒りを示したのは元々短気なタリサ・マナンダル。

片腕に残された一挺の突撃砲を構えると、全速力で水平噴射跳躍。

一瞬で距離を詰めつつ引き金を引いた瞬間 ホワイトグリントも動きを見せる。

「ん、なあつ！？」

タリサの水平噴射跳躍<sup>ホライゾナルブースト</sup>と同じタイミングで前方にクイックブースト タリサのF-15・ACTV<sup>アクティヴィーグル</sup>とホワイトグリントはお互いに接近するよう<sup>アクティヴィーグル</sup>に加速するが、激突はしない。

地面を走るF-15・ACTV<sup>アクティヴィーグル</sup>に対して、ホワイトグリントは上空上<sup>アクティヴィーグル</sup>というのは最早後方危険円錐域と等しい意味合いを持つ。そこを取られたままホワイトグリントは左腕の063ANARを連射。トップアタックの様に上部から放たれたペイント弾は、両肩と頭部、そしてコックピットプロックに被弾。

それと同時に、ホワイトグリントの体がまたも“変形”を始める。背部の一端に並べられた無数のブースターは一列へと代わり、両腕は突き出すように前へ、頭は胴体にうずめられ

「ツ」

確かにソレを視界で捉えたものの、僅かにホワイトグリントの方が早かつた。

再び、瞬間に時速2000kmを超えるオーバードブーストを行

い飛翔していくホワイトグリントは、一機のF-15Eにヘッドオンで突っ込むようにしながら両腕のライフルを乱射

ストライクイーグル

「あーーツ、納得いかねエーーツ！！」

模擬戦の終了後、ブリーフィングルームにて悪態を吐きながらタリサは言う。

先の戦闘結果 赤子の手を捻るように弄ばれ、己が起死回生の一  
手を放ったと思えば漸く本気を出して悉くその作戦を粉碎する。  
明らかに最初の数分は“遊んで”いた……いや、タリサから見れば  
“遊ばれて”いたのだ。

それは当然、衛士としての誇りを持つタリサにとって我慢できる事ではない。

しかしタリサとて分かつていた 数日前のソ連の戦術機との突発的  
的なドッグファイトの時ですら認めようとしなかったタリサですら  
認めてしまった 彼我の圧倒的な能力の差を

「あれがネクスト……確かに、あんな戦術機が何十機も居たら戦局  
は簡単にひっくり返るわね」

「だが実際のところ、ネクストが最も活躍できるのはハイヴの突入  
戦じやなくて開けた土地でのBETAの闘争だからな。」

あんな戦場じゃネクストは持ち前の機動力を活かし放題だし……で、

ユウヤはどう思う？

「…………」

突如話を振られたユウヤは、若干の戸惑いを見せる。

考え事に耽っていたのか、ずっと会話に参加しなかったのをヴァーリオも不振に思ったのだろうか……

奇しくもユウヤが考えていた事も彼らの会話内容と同じく、先程の作戦のネクストの　いや、“パイロット”の動きだ。

「……アイツ、常に俺の背後を狙ってきてやがった……ビルの隙間に隠れたときも、最後に攻撃する時も……」

思い返せば、ずっとそうだ。

一番最初、オーバードブーストで近づいてきたホワイトグリントを迎撃しようとするが瞬間にビルの隙間に消えていき、次に現れたのは己の背後。

武装を一つ失いながらもそこから退避し、リロードを行おうとすればまたもビルの背後から現れる。そしてこれに反撃しようとすれば今度は己の頭を飛び越えて背後を取り、射撃　大破。まるで全ての行動を先読みしていたかのようなこの行動、これにユウヤは常に翻弄されていた。

「そういえばそうね。……あんな動き、よっぽどAH戦演習をし

ない限り出来る動きじゃ……」

「残念ながら」

ステラの言葉を遮るようにブリーフィングルームに現れたのは、アスピナ機関から派遣されたリー・バトラー。

「彼が対人戦闘を行なつたのは……対ネクスト戦を除けば今回が初めてですよ。

……ええ、良いデータが取れましたとも。有難うございます」

嫌味つたらしくそつまつ彼の田付きには、侮蔑にも似た感情が見て取れる。

それもステラやコウヤだけではない 全員に向けて、だ。 そうして、少し遅れて先の少年が入ってくる。  
何処か水気を帯びている金髪から察するにシャワーでも浴びてきたのか……何処か火照つたような表情で、首筋には先程と同じくマフラー。

リーに向けて遅れましたと咳きながら頭を下げて、顔をアルゴス試験小隊の面々に向ける と一人の少女と田線が合つ。

「えつと……なんでそんな……怒つてるのでしょうか?」

「何でつて 本当に分かつてねーのかよ?」

「……えつと……?」

「ツ て、めえつ……!」

敵意丸出しでエクスを睨みつけるタリサだ。やはり先程の怒りは収まつておらず、それ故にエクスに向ける田線もかなり冷たい物だ。

しかしそれでも惚けようとするような態度を見せる少年に業を煮やして立ち上がりとした瞬間

「ああ、先程の戦闘内容ですか? アレは私が指示した物ですよ。

貴方達がネクストの力に不信感を抱いているようでしたので、"出来る限り遊んでから" 倒せ、とね……」

「……！」

そう挑発する様に発言するリーに対しても、当然、タリサは何も出来ない。

軍属で無い故に階級こそ無いにしろ、彼はXFJ計画における一つの要。AMSに関する職務を一手に背負う重要人物なのだ。殴りかかりなどすれば自分にも、そして周りの人間にまで事が及ぶ可能性がある。

普段ならばその短気な性格から殴りかかるまではいかないにしろ、文句かいヤミの一つでも言ひそつた物では有つたが

それを見た彼は、ほう……と意味深な嘆息の息を漏らすだけで。

「では、失礼しますよ？私は先のホワイトグリントのデータを纏めなくてはいけないのでね。」

終始侮蔑の色を目に移したまま、そう言つて立ち去つていく。後に残されたのは、剣呑とした静寂とアルゴス試験小隊の面々にエクスだけ。何か迂闊な事を少しでも喋つたら爆発してしまいそうな緊張感の空氣の中。

「あ、あのっ……！」

最初に口を開いたのは、意外にも無口だと思われていたエクス。緊張のせいか若干上擦つた声は実年齢よりも更に低い年齢の子供の声を彷彿とさせる物で、とても先程までの様な戦いを披露していた物とは思えない。

そのギャップには一瞬でも驚いたような顔をするも、次の言葉は何

かと清聴する。

「あの人非礼は僕から謝罪します……ですけど、バトラーさんも

凄く大変で、だからあんな風に」

「だったら、黙つて許せつていうのかよ！？」

「そ、そうじゃなくてっ……！」

「でもそうね、私もあそこまで言われたら黙つてられないかしら……」

…

驚くことに、息巻くタリサに最初に加勢したのはステラだった。ここでは無言を貫いているもののユウヤとヴァーレリオとて同じ考え方だ、目の前の少年は上の命令に従つただけで何の非も無いことはいえ、先程のあの男の言った事はそう易易と許せる物でもない。当然彼らの気持ちも少年は理解しているのか　それ以上リー・バトラーをかばう事はなく……

「……今度」

「ん？」

「今度、僕用の戦術機が届きます　AMSは搭載していますけど、通常操縦ノーマルと同じ能力で……」

「…………へえ……」

取り繕うように言われた言葉、その意味を最初にタリサ　それ

以外の三人も理解したのか表情に笑顔を浮かべる。

機体差も、上官の命令も無い完全に実力勝負の申し出……それはアルゴス試験小隊　特にタリサにとつて願つたり叶つたりな物で。

「分かった、今回お前の勝ちって事にしておいてやるよー。  
だけど、次は絶対に負けねーからなッ！」

「機動ログに損傷は完璧、あれほどの戦闘をしておきながら精神状態は常に安定したまま……

……」これが、これがリンクスか

一人自室で簞唯依はそっぽやく。

手には先の戦闘の資料 その半数以上をエクスペリメント〇五とホワイトグリントの物が占めている。

先程のAH戦演習は当然唯依も閲覧していた 最初は半信半疑で、所詮ネクストのスペックなどデータ上の物だけで実際は大した事がないのではないかと。

しかし 違つた。

間違いない、リンクスは ネクストは戦力になる。

出来ることならば一刻も早く帝国もネクストを量産して国内のBE TAを、ハイヴを徹底的に叩くべき

「 だが……」

そのためには、AMS適正を持つ貴重な人間 もしも適正があるのならばあのような幼子の体を改造してまで戦場に送り出さなく

てはいけない……

さらにそれに付き纏うA M S障害、人格障害の危機……機体ダメージがファイードバックする特性から当然P T S Dも出るだろう。実践で使うには余りにも 余りにも危険で、非人道的な兵器なのだ。

「彼奴とて、それは分かつている筈……」

……なら、知つていて尚それを受け入れる彼は一体何故……？ 何故あのような年端もいかない少年が、それほどのリスクを背負つてまでネクストに乗つっているのだろうか……？

唯依が衛士となつた理由は國と民を守るべき武家に生まれたからだが、彼は何故あそこまでして戦おうとする……？

己と同じ“公”故の理由なのか、それとも“私”故の理由なのか。

資料など調べても、彼の経歴は一切出てこないし本名ですら出でこない。

それが分からぬ以上、彼に直接聞くしか無いのだが

「……彼奴はただのテストパイロットだ……それ以上でも、それ以下でも無い……」

何故自分が、こうも他人、……それも特定の個人に冷たく当たるのか……今までこんな事無かつたというのに。

此処に来てから一人目のコウヤ・ブリッジスは理由がハツキリしている。

なら、自分は何故彼 エクスペリメント05 にこうも冷たく当たるうとするのか、答えはまだ分からぬまま……

## 第一話（後書き）

### 突発的なアンケート

Q ・これから話しが進むに連れて他のリンクス達も少しづつ出てきますが、誰が良いかをアンケートで募集します  
物語の重要な部分に関わる事は行いません、あくまで主人公の戦友や仲間としてちょっとだけ出てくるだけです。

- A ・重装ENタンクの自「」中お姉さん スティレット
- B ・20秒で防衛部隊全滅させるマジキチイレギュラー ジュリアス
- C ・相性最高の実弾派重量級 メイ・グリンフィールド
- D ・貴方のハートも弾薬費も吹っ飛ばす！ エイ＝プール
- E ・悪夢のフラッシュユロケット、死の月光 アンジェ
- F ・少佐砲に泣かされたガチタンプレイヤーは数知れず ウイン・D

一人一票まで、お好きなキャラに投票して下さい  
投票は感想欄へお願いします。 人気投票で上位のキャラからどんどん出していくので……

## 追記2 各設定の訂正について

ミド・アウリエルのリンクスレポートを読み、色々と設定の間違いを確認したので訂正です。

- AMS接続用のジャックについて  
金属製のAVケーブルの様な者ではなく、肌色のシリコンの様なもの。外見的にはじっくり見ないと気付かない程度。  
正確な場所は頸椎ではなく首の横側。脊髄等はナノマシンを用いて自然と改造されていく。

- 機体ダメージのファイードバックについて  
機体のおった損傷をセンサーが感知し、それを直接触覚や痛覚として登場者に伝える事はない。  
その代わり、本来の手足が有る筈なのに別の手足を失ったような幻肢感覚に苛まれる。
- これはネクストを降りた際にも同じく、適正の低い者はこの時点で睡眠薬が無いと眠れない程の激しい頭痛と嘔吐感に襲われる。

## 第三話（前書き）

これから正月にかけて忙しいので、今年の更新は多分これが最後になります  
非常に短いです、ごめんなさい

## 第三話

“何故、お前は戦う?”

初めて僕にその問い合わせたのは誰だったか。

“お前の求める答えは何だ?”

その時、僕は答えを出せなかつた。

今ならば、この問い合わせに答えを返せるのだろうか。

私は思想家だ、私は私ですら破壊出来た

私は射撃手だ、それしかできない赤ん坊

私の心はもうかき乱れている、どうか貴方から私の心に触れて  
欲しい

どうか私に、この戦場の答えを聞かせて欲しい

私は思想家だ、そんな私はもう殺してしまった

私は射撃手だ、ただ赤子のように殺す事しか出来ない

私の心はもう限界だ、貴方にこの心を救つて欲しい

どうか私の、この戦場の答えを聞いて欲しい

私は戦場の つまでも てい

: Play for Answer

「精神状態に、今までに見られない反応……？」

「装置に異常は見られていない……おかしいな、これは……」

ユーロン基地、アスピナ機関に貸し与えられた施設の一室では今日も実験が行われている。

なんていう事はない人体実験 モルモットに投薬を行い、センサーでデータを何時間も取り続ける。彼らからしてみればその程度の認識だ。

彼等にとつてリンクスなど所詮はその程度 己の研究への欲望を発散させる人形に過ぎない。

そんな彼等が、この異常なデータに興味を示したのは当然の帰結か。

「珍しいですね、彼が心を乱すなんて……そんな要因は無いと思つていましたが」

「たしかに……」Jの基地にして、Jの短期間で彼の心を揺さぶる事件が起きたとでも?」

「……過度な心理状態の急変はAMS適応障害を引き起こす事もある、が……この程度ならば問題は無い。」

「そうですね……ではこれより、神経系のナノマシンの動作チェック及びAMS伸長度合いの確認を」

2001年、5月10日アメリカ合衆国・アラスカ州 コーラン  
陸軍基地

頭がボーッとしている、視界もどこかぼやけていて、上手く真っ直ぐに歩けない。

気分も優れている訳ではなく　かといって落ち込んでいる訳でもない、微妙な感覚が延々と続いている。

実験が終わった後はいつもこいつだ。

「エクスペリメント、05……」

アスピナ機関において、リンクスは本名で呼ばれる事はあまり無

い 理由は知らないが、上には事情が有るのだろう。

『えられる名は半ばコードネームじみた物ばかり。人間らしい名を『えられる者も居れば、酒や武器の名前をもじつただけの者も居る。

その中で唯一 僕だけが、この様な名前で呼ばれているのだ。

五番目 の実験体……別にこの名前が不服といつ事は無いし、事実僕の立場もそれと同じ。

実戦に出る事は無く、延々と投薬試験やAMSの実験、JIVE Sによる動作チェックや戦場における試作品の耐性テストただこのような“お遊び”にも近い試験を一、二年も続けている。

「ランク1、か……」

飛んだ皮肉じゃないか、実戦経験は殆ど無い癖にちょっと適正が有つてシミュレーターで強いから天才扱い。

自分なんかよりも、実践経験の豊富なリンクスの方が強いに決まっているのに……

「 なにが、てんさいだよ……」

その言葉は痛烈な自虐か、己を天才と祭り上げる者達への叱咤か。どんどんと意識に白くもやがかかつしていく状態の中、徐々に足腰にも力が入らなくなつていき壁にもたれかかる。

……ああもうこのまま眠つてしまおうか……思考能力も判断能力も徐々に奪われ始めたその時。

「貴様は……お、おい？ 大丈夫か！？」

田の前から声 女性の物。 なんとか開いた視界に映ったその姿は、つい先日にも見た確か

「たか、むらちゅう……い……？」

## 第三話（後書き）

第一話のアンケートはまだまだ募集していますよー

尚、主人公のテーマ曲が完全に決まったので、ここにて  
通常時「Beginning of Breeding」「Equi  
nox of Insanity」

戦闘時「Time of Insanity」「Blind Al

ley」

普段は大人しく、寧ろ寂しげなのに戦闘になればいきなり激しく敵  
を殲滅しようとする……

そんな感じのイメージを抱いて頂ければ、ぶっちゃけ作者がこの文  
章を書く時はいつもこのうちどれかが流れています

尚、序盤で長々と出てこる歌は「Thinker」……といつても  
本家は英語ですが

翻訳内容は主人公にあわせて一部をほんの少しだけ改変した物です。

ではまたね、よいお年を！

## 今年最後の更新 もといネタ（前書き）

ただのネタ

ネタ、どうしようも無いネタ

一応第一話のバリュエーションという設定

## 今年最後の更新 もといネタ

ネタの1

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング群が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eストライク・イーグルが、一挺の突撃砲を片手に、一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いているのだ。

音響センサーにひつかからないようにゅつくりと、出来る限り音を立てず……既に何度もわからない交差路のクリアリングを行なつてから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るユウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”ユウヤは一人で別行動をとっている……理由は

至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたいからだ。

「複合センサーにも引っ掛けからない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間　コックピットに警笛音が響きわたる、距離は遙か前方　複合センサーが表示した単語は不明。じこくnoon。

そして此処、ユーゴン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などコウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？）こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引っ掛けられない訳がないだろうが……まあいい。わざわざと撃破して終わらせてやるー。」

そつ思い突撃砲を構えた途端、コウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接近している　迎撃はまだ間に合つ、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かつて射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはコウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持つている故か　だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でテレポートする様に消えたのだ。次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント〇五に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になつて重くのしかかり ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は

“白”

ビルの屋上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名は「LINE ARK。

「ホワイト、グリンツ 閃光 ……え？」

それは、なんと形容すれば良いのだろうか。

右腕の様に突き出されたそれは六本の鉄板 ギザギザとした鉄屑がまとわりついたかのような ユウヤ・ブリッジスの記憶に有るそれは、モーター・ブレードとかチーンソーとか呼ばれる物。

その六本のチーンソーは円柱の様に配置され、それは突き出されたままドリルの様に高速回転し 余りの熱量に赤く赤熱したソレは周囲に熱を散蒔き、大氣すら赤く燃やしている。

「ちよ、ちよっと待て

一瞬、そのチーンソーを大きく振りかぶったと思うと 右ス

トレードの様に正面へ再度突き出す。

高速回転する六本のチーンソーは、アスファルトを焼き溶かし、地響きの様なおぞましい音を立てながら、ユウヤ・ブリッジスへ迫り

ギャアアイイイイイイイイー！

リ

「う、うわあああああ！？」

アスピナ機関が開発したオーバードウェポンの一つ、“グラインドブレード”

六本のチーンソーを赤熱する程の熱量が発生するまで高速回転させ、オーバードブースト、クイックブーストと同時に突進しながら突き出す近接戦闘における究極兵器。

模擬戦用に威力を落としていたとはいえ、その凄まじいインパクトはユウヤ・ブリッジスの心に凄まじい傷を作った

## ネタの2

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング群が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に… 機械音が響きわたる

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eストライク・イーグルが、一挺の突撃砲を片手に、

一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いて

いるのだ。

音響センサーにひつかからないようにゆっくりと、出来る限り音を立てず……既に何度もわからない交差路のクリアリングを行なつてから、コウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るコウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”コウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたいたからだ。

「複合センサーにも引っ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間、コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方、複合センサーが表示した単語は 不明 J n k n o w n。

そして此処、コーコン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などコウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？　こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引っ掛けられない訳がないだろうが……まあいい。さっさと撃破して終わらせてやる！）

そう思い突撃砲を構えた途端、コウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接近している。迎撃はまだ間に合つ、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かつて射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはコウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持つている故か、だが、この反応速度ですらネ

クストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でテレポートする様に消えたのだ。次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”  
“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至つては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になつて重くのしかかり、ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は

“白”

ビルの屋上ストレスレーに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名は“LINE ARK”。

「ホワイト、グリンッ 白の  
閃光 ……え？」

その姿は、純白。

ともすれば戦術機よりも巨大な榴弾砲を背に持ち、両腕は奇形例えるならば、直方体にそのまま穴を開けたような。

その速度は、鈍足。

先程までの異常な加速は追加ブースター VOB によって一時的に得ていた物であり、その挙動はそちらの戦車と同じ程度。

神とは即ち  
God Is

その装甲は、城塞。

戦術機の持つ120mmですら貫けるかが不安になる、要塞をそのまま人型にしたかの様な分厚い装甲。

ガチタンである  
Force

その脚部は、戦車。

雪原を、砂漠を、沼地をも走破する究極の車輪。 その名を無限軌道、キヤタピラと言ひ。

ガチタン、ガチタン、ガチタン。

まるで時代を逆行したかのような、ただ己のネクストの装甲を信頼し、回避を捨て、極限まで攻撃に特化したその剛毅なる姿。人はそれを（ 、神、 ）と呼ぶ。

「ど、どうせ見掛け倒しだろこんなモン……！」

コウヤの駆る F15E の手に持つ突撃砲からペイント弾が放たれる。

回避を捨て去ったガチタンの装甲に、それは容易く命中する が、

しかし

「これで大破判定じゃねえのかよ！？」

幾らコックピット部分に命中しようとも、所詮それは36mmの  
ちっぽけな弾丸 ガチタン 神にその様な物が効く筈が無い。  
例えるならば、針で城塞に穴を開けるような事 兜戯、という文  
字がもつとも相応しいだろう。

放たれるペイント弾の荒しの中、ゆっくりと ガチタン 神は銃口を

### ネタの3

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーロン陸  
軍基地  
テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミーグルディング郡が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている  
“死んだ様な町”の中に… 機械音… ストライク・イグルが響きわたる  
ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eが、一挺の突撃砲を片手に、  
一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いて  
いるのだ。

音響センサーにひつかからないようにゆっくりと、出来る限り音を  
立てず…既に何度もわからない交差路のクリアリングを行なつ

てから、コウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどうが先に全機落とされるかという純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などといふルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るコウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”コウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたからだ。

「複合センサーにも引っ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってかい？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間　コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方　複合センサーが表示した単語は不明 Unknow。

そして此処、ヨーロッパ陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などコウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？　こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引っ掛けられない訳がないだろ？　が……まあいい。）さっさと撃破して終わらせてやるー！」

そう思い突撃砲を構えた途端、コウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接近している。迎撃はまだ間に合う、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かつて射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持つている故か、だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でテレポートする様に消えたのだ。次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”  
“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になつて重くのしかかり、ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は

“白”

ビルの屋上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「ホワイト、<sup>白の</sup>グリンツ閃光……え？」

## 修正プログラム 最終レベル

確かにユウヤ・ブリッジスはホワイトグリントが僅かながら変形機構を備えている事を知っている。

ならば、アレは何だ？

巨大なアンテナブレードの様な物を前面に備え、超大型のバックパックを背中に備える。

カラーリングはホワイトではなく赤 これならばレッド・グリン

トと呼んだ方が相応しい。

その姿は そう、戦闘機だ。まるで翼を無くしたかのようだ。

### 全システムチェック終了

しかしその姿に、異変が起きる。

折り畳まれた両足が伸び、折り畳まれた腕も人型のソレに戻る。  
前方に伸びていたブレードアンテナの様な物は後ろに下がリテール  
スタビライザーに。

触つたら折れてしまいそうな胴体なのに、それから放たれる威圧感  
はネクストとかそんな話しでは無い。

### 戦闘モード起動

不味い、これには勝てない。

人間の本能の様な感覚がコウヤにそう呼びかけるが、その“赤いナ  
二力”が振りまく殺意にも似たソレに思考を動かす事もままならな  
い。

### ターゲット 確認

漸く動いたF15E<sup>ストライクイーグル</sup>が迫撃砲を構える。

それと、同時に“赤いナニカ”も動き出した

D e s t r o y

N i n e - b a l l

## 今年最後の更新 もといネタ（後書き）

べ、別に作者は最初から？が主人公とかガチタン主人公とかしたかつた訳じゃないもん！！

そんな事より、オイイダウンロードコンテンツで買ったMOAが全然先に進まないのだが？ 汚いさすがフロム汚い

## リメイク版 第一話（前書き）

Q・更新が遅れた理由を述べよ

A・

マブラブオルタネイティブ買つたからずっとやつてた  
アリー・ヤのプラモ作つてた  
コトブキヤのプラモは一度と買わぬーよつわああああんー！

オルタネイティブをやって、諸々の知識を得たのでリメイク開始  
相変わらずの駄文ですがお付き合こトとい

## リメイク版 第一話

2001年 4月 30日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称  
エリア51

アスピナ機関、米軍共同研究区域特殊実験施設

「 記録、開始します」

「 今回の実験は、実験対象がAMSのレベルを高めた際にどこまで耐えられるか。

また、それが人体に 」

耳障りな声が僕の乗っている戦術機の集音マイクを通して聞こえる。

この実験も既に何度も分からぬ なのに何の意味があるのか、科学者集団はきょうも寄つて集つてこの実験を繰り返し続けるのだ。

当然、その意味を一介の兵士に過ぎない僕が知る事は無い。

「……聞こえるか?」

「はい 」

「これから実験を開始する、機体と接続しろ」

「了解」

そう言われて、ドライバーシートに身をあずけて 瞬間に、頭の中に数字のような英語のような大量の情報が流れ込んで頭痛を

引き起こす

いつまで経っても、こればかりは慣れないなあ……

脊髄に埋め込まれたナノマシンが僕の機体<sup>ホワイトグリーン</sup>と接続して情報を伝達し、それを脳に送られた瞬間のこの感覚

AMS適正が低い人は、この瞬間に送り込まれる情報量に耐え切れず失神、嘔吐を引き起こす者もいるが幸いにも僕にはそれは無い。

僕の体に感謝しておひこ……

その激痛は一日か三日間続き、その際には睡眠導入剤を使わないと眠れないと聞く。

例えるならば 歯医者で神經を「トロトロ」と削られる感覚が頸椎をはじめとして全身を襲うとかなんとか。

僕の様な適正の高い人間ならばそんな物は発生しないけれども……それでも、ランクの低い人達や適正の低い人はまだそれに苛まれている。

「 るか、聞こえているか？ 実験を開始する」

「りょうかッ つ、ア……」

僕が言葉を言い終えるのも待たず、全身を奇妙な感覚が襲う。

両手足が一本ずつ増えて、それが冷たい外気に晒されている……体の内外から酷い寒気の様な物が襲ってくる……！

しかし、それは僕の機体<sup>ホワイトグリーン</sup>が感じている事であり、ならば今機体と一體化している僕にそれを拒む術は無い。

だい、じょうぶ……耐えられる……耐え、られる……

思い切り、唇を噛む。

この感覚に飲まれてはいけない 機体ではない“僕”が本来持つ  
ている感覚 痛覚に必死に意識を集中して、自分の意識を手繰り  
寄せて離さないようにな……

「大丈夫な様だな、ではこれから一秒おきにAMSのレベルを少し  
ずつ高めていく 耐えろよ？」  
「つ、はいッ……ー！」

出来る限り普通に声を出したつもりなのに、どうしても普段と同じ  
ように発音出来ない。

苦痛とはまた違う奇妙な感覚が、全身を這い回る……それが、だん  
だんと強く強くなり始め……でも、それを僕はひたすら耐えていな  
くてはいけないのだ。

僕はアスピナの実験体。<sup>エクスペリメント</sup>逃げる事はできないし、逃げる場所など  
どこにも無い。

頭の中の思考にひたすら意識を集中して、出来る限り機体の感覚に  
飲まれずに自分の意識を保ち続ける  
ここでもしも機体の感覚に飲まれてしまつたら。……そんな事は  
考えたくもない

自己損失  
人格障害  
精神異常

これらのおぞましい単語が、いつ自分の身に降りかかるか分からないのだ。

事実、僕と同じ被検体、エクスペリメント実験体の者達は皆これらの内どれかを起こし 中には死んでしまった人間まで居る。

それは、それだけは絶対に……！――

救い、なんて物は存在しない そもそも僕は人間ですら無いのだから。

ならば耐えるだけ 終わりが出来るだけ来ないよう、ひたすらひたすら耐え続けて……いつか来る終わりを先延ばしにし続ける

そう、それはまるで

いずれ来る致死の病毒を先延ばしし続ける、この、世界の様な

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4106z/>

Muv-Luv TE-if- (リメイク中)

2012年1月10日23時48分発行